

セルロイドと戦争時の重要書類

昔から播磨富士と親しまれている山があるが、一度登ってみたいと思っていました。最近偶然に版画のコピーを入手でき、版画の山が明神山となっており、この山は大変有名な山だと聞きました。明神山の頂上には、神社がまつられていると言われていました。以前から、明神山と播磨富士は、別の山だと思っておりました。とりあえず、明神山に登ろうと決めました。ところが、この山はただ宍粟にあるというだけで、場所がわかりません。

とにかく北の方へ進んだら行けると思い、6時間かけて徒歩で宍粟に行きました。途中で屋台形式のたこ焼き屋が見えたので、この場所で山の位置を訊こうと立ち止まると、体格の良い老人がたこ焼きを下げて店から出てこられたので、明神山のことを尋ねました。すると老人は、「それがどないしたんや」。ケンカ腰に怒鳴られました。明神山の場所を教えてくださいとお願いしたところ、「何すんや、どないしたんや」と言われたので、登りたいんですと言ったら、「何のために登るんや」と言われました。老人が急に話を飛ばして、「わしは何歳に見えると思う」と質問されました。私は85歳ぐらいですかと言うと、「わしは92歳や」と言われ、「戦艦大和に乗ってたんや」と話され、当時の古びた写真を財布から出してきて、見せられました。これについて色々話されましたが、肝心の山の場所を教えてもらえない状況になりました。すると、わしは戦艦大和に乗るまで、毎日明神山に登っとんたんやと、あれが明神山やと、北西の方角に指をさして教えてもらえました。

その時ふと、戦時中に重要書類を焼却する時に、セルロイドを挟んで焼却したということを知ったことがあり、本当かどうか訊いてみようと思ひ質問しようとしたが、ここから老人の話の内容がふつとんで、飾磨の戦友がわしの横で敵の弾に当たり死んだんやと、頭の毛を遺髪として飾磨に持って行き家族に渡したが、その時のわしの気持ちわかるかと言われ、私は、どのように返事をしていいかわかりませんと老人に返事すると、「そうや」と。「あんたの言う通りや」と。「簡単に返事してもらったら困るわ」と言われました。ほとんどの人間は綺麗事の話をする。現実には綺麗事で済まない。あんたの返事が正しいと言われました。わしは家族に遺髪を渡す時、戦友が死んだと言われんし、ただ涙がぼろぼろ出て、黙って家族に渡したんやと。それから話が長々と続いたが、話の隙を見て、セルロイドを重要書類に挟んで焼却を実際にされてたんですかと訊いたところ、そんなことは知らんと、なんでセルロイドを挟んで燃やさなあかんのかと。戦争を知らんもんが言うた話やろがと言われ、そこで話はぶち切れしました。急に猪に噛まれんように登れよと言われて、ご自身の車に乗って帰られました。これを聞いて明神山に対する思い、老人と戦友の事が山を見るたびに辛い思いが思い出されるから、明神山のことを話すと、感情的になられるんだなと思いました。

明神山と播磨富士が同じだということも教えて頂きました。

結果的に、セルロイドと焼却の関係はわからずじまいでした。

平成 30 年 12 月 14 日

☆著者の三木弘司氏はセルロイド産業文化研究会評議員、特別館長補佐